

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

| | |
|---------|--|
| 氏名 | DENG Yuyang |
| 学位 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 新大院博(文)第62号 |
| 学位授与の日付 | 令和3年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第3条第3項該当 |
| 博士論文名 | 中国語の文末助詞“了”の意味体系の構築 —認知意味論の観点から— |
| 論文審査委員 | 主査教授 朱 継征 副査教授 大竹 芳夫 副査准教授 山田 陽子 |

博士論文の要旨

本論文は、認知意味論の観点から、現代中国語の文末助詞“了”の意味体系を原理的に明らかにすることを目的とする。

文末助詞“了”については、先行研究において、①「過去」を表す、②「将然義」を表す、③「開始義」を表す、④「完了義」を表す、⑤「実現」を表す、⑥「変化」を表す、⑦「新状況の出現」を表す、などの説が提出されている。諸説は矛盾に満ちており、それぞれ“了”の一側面のみを論じ、個別的、断片的な考察に止まっている。つまり、いずれの説も“了”の本質を掴んでおらず、事実上“了”の意味の全体像または意味体系をまだ統一的、かつ合理的に説明できていない。

本論文は、文末助詞“了”の基本義が「転換」であり、その下位概念として「変化」、「出来事生起」、「再肯定」、「要聴」という4つの側面があることを主張する。そして、これらの概念について独自の定義を提示する。①「転換」とは2種類の状態の接点、或いはその接点が指示する動的様式である。②「変化」とは「ある状態から別の状態にすでに変わった」ことを指す。③「出来事生起」とは「動態動詞述語が指示する出来事がすでに起こった」ことを指す。④「再肯定」とは文末に追加される「はい」、「うん」等の間投詞の意味を表す。⑤「要聴」とは「聞いてもらう」という意味を表す。

本論文は、認知意味論の手法を採用し、文末助詞“了”と様々な構文環境との共起関係を考察、分析し、“了”の全体像を多角度からより鮮明に描き出し、その本質をより深く掘り下げる研究を展開している。

本論文は次の 15 章から構成されている。

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 先行研究の検証
- 第 3 章 文末助詞“了”の意味体系の様式の提起
- 第 4 章 文末助詞“了”の内包的意味
- 第 5 章 文末助詞“了”の内包的意味の意味機能拡張
- 第 6 章 文末助詞“了”の行為域の外延的意味
- 第 7 章 文末助詞“了”の認識域の外延的意味
- 第 8 章 文末助詞“了”の言語域の外延的意味
- 第 9 章 文末助詞“了”の意味間の関係
- 第 10 章 文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件の提起
- 第 11 章 文末助詞“了”の行為域の外延的意味を生み出すための構文的条件に関する検証
- 第 12 章 文末助詞“了”の外延的意味の意味機能拡張
- 第 13 章 文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味からみる動相問題と時制問題
- 第 14 章 文末助詞“了”の意味体系の最終確立と先行研究の問題点の振り返り
- 第 15 章 結論

第 1 章では、本論文の研究対象，研究目的，研究意義，研究方法，論文の構成等を述べた。

第 2 章では、1955 年から 2020 年までの研究成果をまとめるとともに、先行研究の問題点を整理した。

第 3 章では、文末助詞“了”の「言語的意味と語用論的意味」、「内包的意味と外延的意味」という意味体系の様式を提起した。

第 4 章では、文末助詞“了”の内包的意味を、「点」的スキーマという認知様式を示す「転換義」と規定した。

第 5 章では、実例に基づき、「転換義」という内包的意味が文末助詞“了”の「充足義」、「話題終了義」、「過度義」、「前提提示義」、「結論提示義」、「事象継続義」などの語用論的意味の形成要因の説明に有効であることを論じた上で、前章で規定した文末助詞“了”の内包的意味の妥当性を検証した。

第 6 章では、認知意味論の「三域説」に基づき、文末助詞“了”の行為域の外延的意味を「変化義」と「出来事生起義」と規定し、この 2 つの意味の命題性、つまり客観性を提示した。

第7章では、認知意味論の「三域説」に基づき、文末助詞“了”の認識域の外延的意味を「再肯定義」と規定し、この意味のモダリティ性、つまり主観性を提示した。

第8章では、認知意味論の「三域説」に基づき、文末助詞“了”の言語域の外延的意味を「要聴義」と規定し、この意味のモダリティ性、つまり間主観性を提示した。

第9章では、文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味の認知的関係のみならず、文末助詞“了”の外延的意味間の「重なる」関係も明らかにした。

第10章では、文末助詞“了”の「変化義」と「出来事生起義」という2つの外延的意味を表すための構文的条件を提起した。

第11章では、实例に基づき、第10章で提起した構文的条件の妥当性を検証した。

第12章では、「変化義」、「出来事生起義」、「再肯定義」、「要聴義」という4つの外延的意味が文末助詞“了”の「新情報義」、「婉曲義」、「任意列举義」、「命令義」、「相手反応期待義」、「対話者共有情報修正義」などの語用論的意味の形成要因の説明に有効であることを論じた上で、本論文で規定した文末助詞“了”のすべての外延的意味の妥当性を検証した。

第13章では、实例に基づき、「転換義」、「変化義」、「出来事生起義」、「再肯定義」、「要聴義」という5つの意味が文末助詞“了”の時間的問題の解決に有効であることを論じた上で、本論文で規定した文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味の妥当性を総合的に検証した。

第14章では、第3章で提起した文末助詞“了”の意味体系の様式に基づき、文末助詞“了”の具体的な意味体系を最終的に確立した。

第15章では、文末助詞“了”の意味体系を構築することの重要性和今後の研究課題を述べた。

審査結果の要旨

本論文は、現代中国語の文末助詞“了”に関する研究成果の集大成でもあり、文末助詞“了”の意味的問題、形式的問題、語用論的問題を克服するための意味論的方法を提示した重要な研究成果でもある。文末助詞“了”の研究領域において、認知意味論の「三域説」という捉え方はまだ十分に活用されていない。本論文は、一貫して認知意味論の「三域説」を用いて文末助詞“了”の意味的問題、形式的問題、語用論的問題などの各種の問題点を明らかにした。こうした研究成果は、認知言語学の観点から高く評価できる。

本論文による具体的な研究成果は、以下の通りである。

1) 「転換義」は文末助詞“了”の内包的意味であり、「変化義」、「出来事生起義」、「再肯定義」、「要聴義」は外延的意味であることを明らかにした上で、これまでの、文末助詞“了”の意味の種類をめぐる論争の本質を明らかにした。

2) 文末助詞“了”の「変化義」と「出来事生起義」の命題性、つまり客観性、「再肯定義」のモダリティ性、つまり主観性、「要聴義」のモダリティ性、つまり間主観性を明らかにした。

3) 文末助詞“了”の外延的意味間の「重なる」関係は、「変化義+再肯定義+要聴義」、「出来事生起義+再肯定義+要聴義」、「再肯定義+要聴義」という3種類の複合的關係であることを明らかにした。

4) 文末助詞“了”構文の述語の意味的焦点の位置を奪いやすい文成分には、少なくとも「非語尾的な補語」、「数量的連体修飾語」、「数量的目的語」、「様態的連用修飾語」、「時間的幅が際立つ連用修飾語」などの5種類があることを明らかにした。

5) 文末助詞“了”の語用論的機能が、文末助詞“了”の内包的意味と外延的意味の意味機能拡張から派生されるものであることを明らかにした。

6) 内包的意味と外延的意味の観点から文末助詞“了”の時間的問題を考察、分析した。

7) 独自の定義に基づき、中国語学習者のために文末助詞“了”の意味記述をより具体化、実用化した。

先行研究では、文末助詞“了”の意味に対する認識は未だ一致しておらず、意味の側面から議論する余地がまだ多いことがしばしば指摘されている。本論文の最大の意義は、独自の定義が付与されている「転換」、「変化」、「出来事生起」、「再肯定」、「要聴」という5つの概念に基づき、文末助詞“了”の意味的問題、形式的問題、語用論的問題の説明に有効な意味体系を提示した点にある。これらの知見には新規性や独自性が認められ、意味論の観点から高く評価できる。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、また言語学固有の分野に関する内容の論文であることから、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。